「資本論を読む会」便り

2024.8.12　No. 89

7月の例会は、新たな参加者をお迎えし、互いに簡単な自己紹介をしたのち、第3篇 第11章 協業 の続きに入りました。

※　編集人の復習ノート。報告の要点と議論の簡単な紹介です。報告や議論を編集人はこう理解したということです。段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと注の付け方で区切っていますが、分かりづらいところもあり、レジュメと一致してない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第90回
第1巻 第4篇 相対的剰余価値の生産　第11章 協業 (続き)

前回の復習ということで、協業から生じる特別剰余価値の説明がありました。

今、商品1個の生産に必要な生産手段を100円とします。これを2人の労働者で1日に10個生産していたのですが、労働者を5倍の10人にして1日に50個生産するようにしました。労働力の価値を一人1日100円、剰余価値率を100%、として計算すると、商品1個の価値は140円になります。

ところが、労働者数を10人にした協業の効果で、商品1個に移転する生産手段の価値を20円低くすることができたとすると、商品1個の個別価値は120円になります。

このようにして、協業による生産手段の節約によって、特別剰余価値を得ることができるという訳です。

第6段落　(344)「同じ生産過程で、または同じではないが関連のある…」　～　(注10) まで

協業の概念規程

●同じ生産過程で、または同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの人々が計画的にいっしょに協力して労働するという労働の形態を、協業という。

ここで協業の概念規程がなされています。

これを受けて、工場の合併は協業と言えるかどうかが議論になりました。単なる経営統合というだけでは協業を進めたとは言えないでしょう。また、工場で何を作っているかにもよるでしょう。一方の工場で部品を、他方の工場で組立てをしているとして、工場を隣接地に移転するなどした場合は協業を進めたと言えるかもしれません。部品の梱包や輸送の手間を節約できるでしょうから。

第7段落　(345)「騎兵一中隊の攻撃力とか歩兵一連隊の防御力とかが、…」　～　(注11a) まで

協業により、集団力と言うべき新たな生産力が生まれる。

●分割されていない同じ作業で同時に多数の労働者が働く場合に発揮される社会的な潜勢力は、個別労働者の力の機械的な合計とは本質的に異なる。
　この場合の結合労働の効果は、個別労働では全然生みだせないか、またはずっと長い時間をかけて、またはひどく小さい規模で、やっと生みだせるかであろう。
●ここでは協業による個別的生産力の増大だけでなく、集団力でなければならないような生産力の創造が問題である。
　例として、重い荷物を揚げる・クランクをまわす・障害物を排除するなどが必要な場合に発揮される社会的な潜勢力があげられる。

潜勢力とは隠れたエネルギーとでも言えばよいでしょうか。集団になって初めて現れる力です。この集団力についても少し議論がありました。
なお、広辞苑によれば、
【潜勢力】内部にひそんで表面に現れない勢力。「―を有する」
【勢力】他を服従させる勢いと力。「―が衰える」
とありましたが、「勢力」の意味がこの段落での使い方と少し違う気がします。

第8段落　(345)「多くの力が一つの総力に融合することから生ずる新たな…」　～　(注13) まで。

集団で働く場合、単なる社会的接触が競争心や活力により各人の個別的作業能力を高め、生産物の量を増大させる。

●協業における社会的接触が、競争心や活力の独特な刺激を生みだして、各労働者の個別的作業能力を高める。これは、人間というものが本来、アリストテレスのいう政治的動物ではないにしろ、生来社会的な動物だということに基づく。

アリストテレスのいう「政治的動物」とはどういう意味かと疑問が出されました。アリストテレス「政治学」に出てくる語で、岩波文庫版では「国的動物」となっています。その言うところは大体次のようです。
　人は家族をつくり、家族は村をつくり、村は国をつくる。これは完成した共同体であり、善き生活のために存在し、共同体の終極目的である。これは自然であり、最善である。人間は自然に**国的動物**である。
人間は国を作る動物だ、という意味のようです。なお、他に「ポリス的動物」という訳もあります。

第9段落　(346)「多くの人々が同じ作業かまたは同種の作業を同時に…」　～　(注14) まで。

多数の人が同じまたは同種の作業を同時に協力して行なうことで、労働過程の別々の段階を同時に行い生産時間を短縮する。

●例
・レンガ積み工は運搬作業を分割し、全体として労働過程を結合する。
・建築において、いくつもの違った方面から同時に着工される場合には労働の結合が生ずる。空間的に多方面から労働対象に着手し、それぞれの空間(壁など)で作業する。
●結合労働者(全体労働者)は、作業全体を観察できる「目と手」、つまり全面性を持っているので、より早く生産物を完成する。

建築の例に出てくる「いくつもの違った方面から着工する」「空間的に多方面から着手する」と言う表現が分かりづらいところです。これは、壁が四面ある建物なら、その四面の壁を同時に作っていくことだと考えられます。

第10段落　(346)「われわれは、互いに補い合う多くの人々が同じことか…」　～　(注15) まで。

共同労働の最も単純な形態であっても、協業の発達した形態において一つの大きな役割を演ずる。

●労働過程が複雑であっても、作業を細分化し、それらを多数の労働者で同時に行うことで生産に必要な労働時間を短縮できる。これは単純な協業がもたらす生産力の増大と同じことなので、これまで強調して述べてきた。

この段落で単純な協業の意義を述べています。
複雑な労働過程でも作業を細分化すれば、各行程の労働者が熟練し易く、生産力が上昇します。この前提として少なくとも行程の数だけ労働者を集める必要があります。さらに労働者を集め、各行程でも協同労働するようにすれば、単純な形態と同様に生産に必要な労働時間の短縮ができる、という訳です。

第11段落　(347)「多くの生産部門には或る決定的な瞬間がある。…」　～　(注17) まで。

生産部門によっては労働過程のある一定の期間に集中的に大量の労働を投入しなければならない場面がある。協業はこれに対応できる。

●例えば、羊毛刈り、農作物の収穫、鰊漁など。労働期間は短いがこの期間に投ぜられる労働量の大きさによって埋め合わされる。この労働者数は、これらの労働を個々別々におこなう場合の労働者数より小さい。
●逆の例：このような協業が行なわれないためにアメリカ合衆国西部では多量の穀物が無駄になっている。また、イギリスによって古来からの共同体が破壊された東インド地方は、収穫時の共同作業が不可能になり多量の綿花を無駄にしている。

農作物の収穫に関連して、収穫期には近隣の農家と協力して短期間に大量の小麦を乾燥機にかける、という小麦農家の話が紹介されました。乾燥機はかなり大がかりなもので、短期間に昼夜を分かたず作業するので共同作業が必要なのだそうです。

第12段落　(348)「一方では、協業は労働の空間範囲を拡張することを許すので、…」　～　(注18) まで。

協業は、労働の空間範囲の拡大を可能にすると同時に、生産規模に比べて生産領域の空間的縮小を可能にし、空費の節約をもたらす。

●協業は、土地の干拓・築堤・運河や道路や鉄道の建設など労働の空間範囲の拡張を可能にする。
　他方で、拡張された生産規模に比べての生産領域の空間的縮小を可能にし、多額の空費を節約させる。

この空間範囲の制限は労働者の密集、いろいろな労働過程の近接、生産手段の集中から生ずる。

注18に、エーカーという面積の単位が出てきますが、1 エーカー ＝4000 m^2 だそうです。

この段落には、「労働の空間範囲の拡大」「生産領域の空間的縮小」といった表現が出てきますが、意味が分かりにくいので検討しました。

「労働の空間範囲」とは、土地の干拓とか鉄道の建設などの例から分かるように、労働対象の空間的広がりです。日本で最初の鉄道は、新橋～横浜間 29 km でした。従って鉄道工事は長さ 29 km に及んだわけですが、これがこの労働の空間範囲になります。

次に、この工事に仮に29,000人の労働力を投入したとします。すると単純計算で一人当たり1 m だけ工事すれば良いことになり、29,000人の労働者全員が29 km を行ったり来たりする必要はありません。「生産領域の空間的縮小」とはこういう意味でしょう。

第13段落 (348)「個々別々のいくつもの労働日の総計と、それと同じ…」 ～ (注19) まで。

協業による結合労働日の独自な生産力は、必要労働時間を減少させる。それは労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。

●結合労働日はより多くの使用価値を生産し、一つの使用価値の生産に要する労働時間を減少させる。つまり高められた生産力を受け取るが、それは労働の社会的生産力・社会的労働の生産力である。この生産力は協業そのものから生ずる。

なお本文では協業のどのような場面で生産力が高められるかが列挙されています。これらの場面がどの段落にあったか説明がありました。それは次の通りです。

①「労働の機械的潜勢力を高めるから…」	第 7 段落
②「労働の空間的作用範囲を拡大するから…」	第12段落
③「生産規模に比べて空間的生産場面を狭めるから…」	第12段落
④「決定的な瞬間に多くの労働をわずかな時間に流動させるから…」	第11段落
⑤「個々人の競争心を刺激して活力を緊張させるから…」	第 8 段落
⑥「多くの人々の同種の作業に連続性と多面性とを押印するから…」	第 9 段落
⑦「いろいろな作業を同時に行なうから…」	第 4 段落
⑧「生産手段を共同使用によって節約するから…」	第 4 段落
⑨「個々人の労働に社会的平均労働の性格を与えるから…」	第 3 段落

ここまでが、この章の前半で、レポーターは次のようにまとめました。

以上の前半部分では、労働の生産力を高めるための生産様式の変革の第一歩として、単純な協業を取り上げ、生産手段の節約や、結合労働の集団力としての生産力の増大などによって労働の生産力が高められることを考察した。そして協業によって生まれる独特な生産力は、労働の社会的生産力、社会的労働の生産力として現われることを明らかにした。